

～招待講演・シンポジウムのご案内～

現在までに開催が決まっている招待講演・シンポジウムについてご案内いたします。

【招待講演 ①（一般公開講演）】

タイトル: Generativity and the Redemptive Self: Narratives of Social Commitment at Midlife

(次世代育成性と補償的自己:成人期の社会的関与についての語り)

講演者: Dan P. McAdams (ノースウェスタン大学教授)

共催: お茶の水女子大学 特別教育研究経費

「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」

概要:

Dan P. McAdams 教授は、ノースウェスタン大学大学院の研究科長をつとめ、professor of teaching excellence としても表彰されている。専門分野は、パーソナリティや成人の発達、ナラティブ研究であり、150 本以上の論文と 14 冊の著書がある。本講演では、主要な研究テーマのひとつである成人の次世代育成性 (generativity) について、ライフストーリーの観点から語っていただく。このテーマについて書かれた著書『The Redemptive Self: Stories Americans Live By』は、アメリカ心理学会より、その統合的な内容に対して Williams James 賞 (2005 年) を、理論的・哲学的貢献に対して Theodore Sarbin 賞 (2006 年) を授与されている。次世代への関心や関わりの強い成人が、自分のライフストーリーをどのように語るのか、それらの語りに歴史的・文化的な背景がどう関わっているのかについて、多くの示唆を得ることができると思われる。同時に、日本における次世代育成性に、より多くの関心を引き起こすことを期待したい。

【招待講演 ②（一般公開講演）】

タイトル: Media Violence and the Development of Aggressive Personality

(メディア暴力と攻撃的パーソナリティの発達)

講演者: Craig A. Anderson (アイオワ州立大学 Distinguished Professor)

共催: お茶の水女子大学グローバル COE プログラム 「格差センシティブな人間発達科学の創成」

概要:

Craig A. Anderson 教授は、米国アイオワ州立大学心理学部の Distinguished Professor であり、メディア暴力研究における世界的第一人者である。

本講演では、メディア暴力に繰り返し接触することが攻撃行動や攻撃的パーソナリティに及ぼす影響を中心に、お話いただく。これまでに、縦断的研究や横断的研究によって、メディア暴力は後の攻撃的なパーソナリティの危険因子であることが示されてきている。また、実験研究は、攻撃性への影響の心理過程を検討し、社会的認知モデルを支持する結果を示してきた。Anderson 教授らの提案した「攻撃性の一般モデル」は、個人、状況、環境、生物学的な要因がどのように攻撃性や暴力に影響するかを示したモデルであり、これまでのメディア暴力が攻撃性に及ぼす影響研究を統合的に説明するものとなっている。本講演では、このモデルについてもお話いただく予定である。

【招待講演 ③】

タイトル: 「パーソナリティと人格を考える」(仮題)

講演者: 藤永保(日本教育大学院大学学長・お茶の水女子大学名誉教授)

概要:

藤永保教授の専門分野は発達心理学。特に言語獲得や、初期環境と人格形成に関する論文・書籍を多数出版し、日本の発達心理学の礎を築いてきた。元日本発達心理学会理事長。現在は、教員養成の専門職大学院である日本教育大学院大学の学長を務めている。

本講演では、言語分析の見地からパーソナリティ心理学の主要概念であるキャラクターとパーソナリティの差異を考察し、さらにはその日本語としての対応語は何か、人格といった用語は西欧語に対応するか、その持つ独自のニュアンスは何かなどの諸問題の検討を通して、パーソナリティ心理学の持つ比較文化的特徴を考察していく。その上で、歴史的事例を借りて日本の人格の特徴について述べていただく。

【準備委員会企画シンポジウム ①】

タイトル: 「クロスロードとしてのパーソナリティ研究 ―過去、現在、未来―」

話題提供者: 社会心理学の観点から 木下 富雄(国際高等研究所)

臨床心理学の観点から 越川 房子(早稲田大学)

発達心理学の観点から 菅原 ますみ(お茶の水女子大学)

指定討論者: 渡邊 芳之(帯広畜産大学)

司会: 坂元章(お茶の水女子大学)

概要:

1992年6月、日本性格心理学会は、さまざまな心理学の領域で性格やパーソナリティの問題が扱われているにもかかわらず、それについて議論する場が乏しかった状況を改善するために設立された。同年11月に日本大学で行われた第1回大会では、「性格研究のこれからの課題」というシンポジウムが開かれ、実験心理学、発達心理学、臨床心理学、精神医学、異文化心理学の著名な話題提供者によって、性格やパーソナリティ研究に対する期待が述べられた。

2003年10月には、日本パーソナリティ心理学会と改名され、現在まで、会員数と、学会誌における掲載論文の数の増加に見られるように、本学会やパーソナリティ研究は、少なくとも量的には発展してきたと言えるであろう。しかしながら、現在までの発展は本当に意義のあるものであったのだろうか。また、将来、本学会やパーソナリティ研究が取り組む課題としてどのようなことが考えられるのだろうか。

本シンポジウムの目的は、会員がこれらのことを考えていくうえで、手がかりになる情報を提供することである。そこで、まず、社会心理学、臨床心理学、発達心理学の著名な研究者から、これまでのパーソナリティ研究の意義や、今後の課題などについて話題提供をいただく。そして、現在、本学会における研究で何が起きていることを最もよくご存じな機関誌編集委員長からコメントをいただく。なお、本シンポジウムで扱う問題は、会員全員に深く関わるものであるため、フロアからの発言の時間を長く取って、多くの先生方からご発言をいただきたいと考えている。

異なる心理学の分野の著名な研究者から話題提供をいただくことは、第1回大会のシンポジウムと同様である。異なる心理学領域が対話できる「クロスロード」としてのパーソナリティ研究の魅力が浮かび上がればと期待している。

【準備委員会企画シンポジウム ②】

タイトル: 「モバイル・リサーチ — パーソナリティ研究の新たな可能性 —」

話題提供者: 携帯電話のメール機能を利用した調査 阿部 美帆(筑波大学)
携帯電話のウェブ機能を利用した調査 森 津太子(放送大学)
携帯電話のカメラ機能を利用した調査 川浦 康至(東京経済大学)

司会: 高比良美詠子(メディア教育開発センター)

概要:

心理学研究における近年の大きな変化の一つは、実験や調査に次々と新しい機器が導入されるようになったことだろう。これはパーソナリティ研究においても例外ではない。例えば、かつては paper and pencil が主流だった性格測定が PC 上で行われることは、さほど目新しいものではなくなっている。

そのような中、最近注目されるのは、携帯電話を利用した研究の実施である。携帯電話は一人が一台ずつ保有する極めてパーソナルなメディアである。また常に携帯されることから特定の個人に常時アクセス可能であり、これは個人のパーソナリティを研究対象とするパーソナリティ研究にとって好都合な特徴といえる。また現在の携帯電話は、単なる通話機器でなく、メール送信、インターネット接続、写真撮影など多様な機能を持ち合わせていることから、面倒なデータ入力の手間が省けたり、テキストデータ以外のデータが収集できたりするなど、研究を実施する上でも多くの利便性が生まれている。

本シンポジウムでは、携帯電話のさまざまな機能を利用して研究をされている3名の方に実際の研究の様子を紹介していただき、会場の皆さんとそのメリット・デメリットを議論する中で、携帯電話をパーソナリティ研究に利用することの可能性を探っていきたい。ご紹介する研究は必ずしも狭義の意味でのパーソナリティ研究ばかりではないが、手続きや TIPS などをなるべく具体的に提供することで、参加者の方がご自身の研究に携帯電話を導入するきっかけの場となることを望んでいる。また、本シンポジウムの中で、実際に「モバイル・リサーチ」の一部を体験していただきたいと考えているので、ぜひ携帯電話を持参して参加していただきたい。

【準備委員会企画シンポジウム ③】

タイトル: 「人はなぜ犯罪を起こすにいたるのか — パーソナリティとの関連を探って —」

話題提供者: 大淵 憲一(東北大学)
酒井 厚(山梨大学)
相澤 仁(元厚生労働省虐待防止室室長補佐, 現国立武蔵野学院院長)

指定討論者: 安藤 寿康(慶應義塾大学)

司会: 菅原 ますみ(お茶の水女子大学)

概要:

犯罪とパーソナリティとの関連については、一般にも高い関心を持たれているテーマである。本シンポジウムでは、犯罪に至るまでの個人の軌跡について、パーソナリティと環境との相互作用の観点から考察を試みる。

シンポジストとして、犯罪心理学、少年非行の現場、犯罪傾向の発達に関する発達精神病理学の研究者3名の方に、それぞれの立場から犯罪に至る道すじにパーソナリティがどのような役割を果たしているかを考察していただき、討論していく。また指定討論として、行動遺伝学の立場から犯罪傾向とパーソナリティについて総括的にコメントしていただく予定である。

● 本シンポジウムは、臨床発達心理士資格更新ポイント(0.2ポイント)の対象となります。

【McAdams 博士セミナー】

タイトル: A New Big Five: Fundamental Principles for an Integrative Science of Personality
(ニュービッグファイブ:統合的なパーソナリティ科学のための基本原則)

発表者: Dan P. McAdams (ノースウェスタン大学)

コメンテーター: 黒沢香 (東洋大学)

コメンテーター: サトウタツヤ (立命館大学)

司会: 小塩真司 (中部大学)

企画: 日本パーソナリティ心理学会 国際交流委員会

概要:

Dan P. McAdams 先生は、パーソナリティや成人の発達、ナラティブ研究を専門としており、多くの論文・著作がある。本セミナーでは、McAdams 先生の発表を中心に、日本人研究者も参加して、パーソナリティをどうとらえるのかについての議論を深めたいと考えている。具体的には、まず、McAdams 先生にパーソナリティ心理学の歴史と今後の方向性を理論的に統合した“New Big Five”について語っていただく。New Big Five とは、①進化の過程で残ってきた性質、②Big Five をはじめとする性格特性、③状況や課題によって異なる行動パターン、④ライフ・ナラティブとアイデンティティ、⑤文化の影響、である。続いて、黒沢香先生とサトウタツヤ先生から、日本のパーソナリティ研究の動向を含め、コメントをいただく。最後に、フロアの参加者も含めてディスカッションを行う。本セミナーを通じて、パーソナリティをとらえる歴史的視点や統合的枠組みの理解が深まることを期待したい。

【日本臨床発達心理士会企画シンポジウム】

タイトル: 「発達障害児者のパーソナリティをふまえた発達支援をいかに行うか」

座長: 本郷一夫 (東北大学大学院教育学研究科)

発題1: 高橋和子 (金沢大学大学院医学系研究科こころの発達研究センター)

発題2: 大石幸二 (立教大学現代心理学部)

討論: 秦野悦子 (白百合女子大学大学院文学研究科)

企画: 日本臨床発達心理士会

概要:

臨床発達心理士は、今日までの発達臨床、発達障害に関する発達心理学の貢献および成果をふまえ、個体能力へのアプローチと環境諸要因へのアプローチを具体的に進めてきた。その中で、個人差の問題については盛んな議論があるものの、特に発達障害のある児者のパーソナリティ発達やその特性をふまえた発達支援のあり方についての議論は少なく、これらの問題を中心的な課題とする実践的な研究もその蓄積が乏しい。

われわれは、臨床発達心理学的なアプローチを適用する過程で、発達障害のある児者においても比較的安定的に見られる行動の現れ方ある一方で、外的な状況に存在する“力”によって変動する反応があることを了解している。そして、それらのパーソナリティに関わる要因を考慮に入れたうえで、われわれのアプローチをアレンジしている。けれども、①パーソナリティ要因をいかに把握し、②それをどのように考慮に入れ、③われわれのアプローチをどのようにアレンジして、対象児者にカスタマイズしたかについて十分に記述してこなかったために、先に指摘した課題を残している。

本シンポジウムでは、以上のことをふまえ、発達障害児者、特に自閉性障害のある児者への臨床発達心理学的なアプローチを適用した事例を挙げ、その中でパーソナリティ要因をいかに取り扱うことができるかを討論する契機を提供したい。

● 本シンポジウムは、臨床発達心理士資格更新ポイント(0.5ポイント)の対象となります。